ヘネラリーフェの宮園

岡崎 文 彬

On the Gardens of the Generalife

By Ayaakira OKAZAKI

1. ま え が き

Fouquier と Dûchenel) は名著《Des divers styles de jardins》のなかで「13世紀につくられた庭園の姿にいまでもわれわれが接しうるのは世界中でスペインだけである」と述べている。13世紀を文字どおりに解して12世紀以前まで溯ることなく、また世界を西欧と解釈すればこれらの主張は正しい。「バラ物語」にみる城郭の庭園はもとより、キリスト教の寺院建築に付随して造られた庭園で当時の面影をとどめているものはどこにも存在しないからである。中世の回教文化、とくに建築文化はその教義が及んだ広い地域にわたつていまなお健在である。しかし庭園となるとスペイン、それもアンダルシアを除いては築造当時の形体を止めているものは現存しない。アンダルシアのうちでも特記すべきはグラナダであるが、それはアランプラ宮殿とヘネラリーフェの離宮が厳存するためである。むろん両者ともその庭園は構築当初のままに保存されているわけではなく幾度か変更を加えられたが、主要部はいまでも十分当時の様相を窺わせるに足るものと考えられる。とくに庭園の上からはアランプラよりもヘネラリーフェの方がいつそう重要視せらるべきであろう。

2. 沿 革

アランプラ宮殿の創設は13世紀前期であるが、ヘネラリーフェ離宮の本格的な築造はそれよりおそく13世紀の

後半と考証されている。Mohammed Ibn Al-hamar が43才にしてグラナダの初代の王位についたのは1238年であるから、アランプラの工事が始まつたのはナスリーデン王朝樹立後間もなくのことであつた。二代目の Mohammed II も父のあとをうけて土木、建築に力をいれたが、ヘネラリーフェに改修が加えられ、紛飾されたのは Abdul Walid Ismael 統治下の1319年であつた。このことは離宮内部の壁に刻まれた現存の文字からも疑いないが、起工は13世紀後半と推定されるだけで、詳しい年月日は不明である。

ただしナスリーデン王朝時代に造られたことは間違いないなるべく、それは Generalife の前名 Ginaralife が回教王の庭園を意味するアラビア語 Dschennat al-'Arif に由来しているところからも想像がつく。もつともヘネラリーフェの語源に関しては Ingalls²⁾ や Hernando de Baeza³⁾ などの異説があるにしても、それらはなんらヘネラリーフェが回教王の構築であることを否定する材料にはならない。

グラナダの最後の回教王は Abu Abdallah Mohammed, すなわち Boabdil (=él Rey Chico) である。ボアブデイル妃にまつわるロマンスの真偽はともかく、かれの悲劇のものは Irving⁴⁾ がチコ王に同情的な記載をしているように父王 Abul Hassan の側に求められるべきだろう。それはともかく1491年にグラナダがカトリック教徒

アランプラ宮殿およびヘネラリーフェ離宮平面図
(Gvomort による)

1812年におけるヘネラリーフェ離宮平面図
(Villiers-Stuart による)

であるスペイン人の手に落ちたとき、その人口は50万を数え、最盛期には70万に及んだこともあるという。1924年に約8.5万、1929年に約10万、1950年に15万余、いまでは20万を軽く突破しようが、なおムーアの全盛時代には遠く及ばない。

さてヘネラリーフェは15世紀末 Isabella の命によって宮殿を高層にしたが、その時の拡張工事は現在ほとんど消失して追跡し得ない。大多数の文献で触れているのはヴェネツィアの Navagero⁵⁾ の1526年の訪問記である。庭園の詳細を述べている最古の文献といえよう。

Villiers-Stuart⁶⁾ の著書に引用されている1812年のヘネラリーフェの平面図をみれば、主要庭園であるカナルのパティオ (Patio de la Acequia, カナルとみるにはあまりにも狭い明渠に清水が溢れているためか、Patio de la Riadah と呼ぶ)、そのすぐ上のサイプレスのパティオ (Patio de los Cypreces)、逆にその下の——現在でも最下段をなす——露壇ならびに上方の水階段はみられるが、いまツゲの刈込みをモチーフとしている露壇はみられない。なお Gromort⁷⁾ が《Jardins d'Espagne》に引用している Lamperez と Romea の「ヘネラリーフェの往時の平面図」にはカナルのパティオだけが描かれているが、それはサイプレスのパティオのなかつた証拠となり得ないことはいままでもない。

Navagero の記述はかなり微に入り細にわたっているが、Villiers-Stuart の平面図と抵触しないから、現在の上部数露壇は望楼と同様後世付加されたものと考えてよ

い。

Navagero の訪れたとき、庭園はかなり崩壊していたが、それでもかれはヘネラリーフェに最美の庭園を見出しているから、すぐれたパティオとしてのムードは十分にただよっていたのであろう。

前記ツゲの刈込みをモチーフとする上部の各壇は近世につけ加えられたものであり、そのことは Evonymus, Magnolia (grandiflora) などの外来樹種が数多く使われているところからも⁸⁾、またその様式が純ムーア風でなく、むしろイタリア・ルネサンス式に近いところからも推測に難くない。

ヘネラリーフェ宮園の南に、これと接して造られた庭園は近年の作である。1963年6月の初め筆者が満29年ぶりに再訪したとき南端の野外劇場はまだ未完成だったが、同年7月の完成が予告されていたから、すでにでき上っているにちがいない。それは上部露壇よりもずっと華麗なものであるが、様式としてはイタリア・ルネサンスのものに近い。

なお水階段とも呼ぶべき階段近辺がツゲの露壇よりも古いことは確かであるが、それがはたしてカナルのパティオ同様、作庭当初のものであるかどうかはわからない。ただ Gothein⁹⁾ が述べているとおり、その技巧はムーア個有のものではないにしても、ローマ時代に使用されている以上、その技巧をムーア人がとり入れたことは十分に考えられる。ましてダロの上流から水を庭園に導かなければならなかつたとすれば、それを水階段の形としたことはむしろ当然かも知れない。

本離宮の所有者は回教王の滅亡後 Fernando と Isabella,

ヘネラリーフェ離宮の平面および断面図
(Byne による)

ヘネラリーフェ離宮の鳥瞰図 (Byne による)

1. カナルのパティオ。玄関からカナルを通して北の主建築（宮殿）を見る（1934年6月撮影）

Carlos V, 城代 Don Pedro を経て何代かにわたるグラナダ侯にと移つたあと、国家の管轄下になって現在に及んでいるわけである¹⁰⁾。

3. 構成と局部

グラナダ市の北東部、ダロ川の左岸の「太陽の丘」（Cerro del sol）に城砦（Alcazaba）とアランプラ宮殿ならびにヘネラリーフェの離宮が建っている。

シエラ・ネバダの北麓に展開するグラナダの街そのものがすでに海拔700mに近く、緯度ではむしろ高いセビリアより植物の開花が平均10日もおそいといわれるほどである。

アランプラ宮殿よりもさらに谷を距てて50m高く位置

2. カナルのパティオ。宮殿からカナルを通して南の玄関建物を望む（1963年6月撮影）

するヘネラリーフェが夏の離宮とし造営されたのは自然である。いまヘネラリーフェの頂点となつているミラドル（アラビア語 Manzar は望楼を意味するが、のここは礼拝堂となつた）は1836年に建てられたことがわかつてはいるが、それにしても宮殿が初めから太陽の丘の頂上に建造されなかつたのはなぜだろうか。Bynell¹¹⁾ は北風をさけるためであると推測しているが、アルバイシンを距てて北には丘陵があり、ここが回教王の夏の離宮であつたことを考えると必ずしも Byne のいうのが正しいかどうか。むしろ東斜面の急勾配と水のためであつたと考えるべきではないだろうか。

アランプラとその西に隣るアルカサバは目と鼻との間にあるが、アランプラとヘネラリーフェも最短距離によつて結ばれていたことは疑いなく、いまでも連絡路がみうけられる。すなわちヘネラリーフェ離宮の入口は西側だつたわけである。ところが現在は迂回路を徑て南南東から入るようになってはいる。そのアプローチとしてサイプレスの巨木を両側に擁した歩道がある。これは天下一品の並木として現在も健在であるが、その途中から西に新しい迂回路ができ新庭園（旧庭園よりも下方にあるので Los jardines bajos と呼ばれている）をとつて16世紀の建造になる玄関に達するようになってはいる。

玄関の建物をとおると、これと対面する北の主建築である離宮とのあいだに南北48.7m長、東西12.8m幅のカナルのパティオがあるわけである。

主建築も後年改装拡張され、玄関の建物が16世紀に建つたことはすでに説いたとおりであるが、カナルを中心としたパティオとロジアの一部は13世紀後半の初期築造にかかるものであろう。東西のすばらしい柱廊と塀がこれと同時代のものであつたとしても玄関の北建築がなかつた以上、ここがパティオなる語にふさわしかつたかどうか。ただし玄関建築が完成してからすでに4世

3. サイプレスのパティオ。出島の中心にある水盤がカナルのむこうには見える。現在出島の繁みはよく刈込まれて整然としている。サイプレスの巨木は写真の右上、上部露壇との境に近く立っている。（1934年6月撮影）

紀以上、スペイン人がここをヘネラリーフェ随一のパティオと讃えてきたのはもつともである。パティオの建築とカナルおよび水工はここ30年のあいだほとんど変化していない。もつとも1921年から25年にかけて内部を補修した主建築はその後外貌がやや荒廃したかのようなのであるが、抜本的な変容を示していないことはもちろんである。ところが著しく変化したのは植物である。この間の様相については本誌上で筆者¹²⁾ が発表しておいたように正確な記録がない以上時代別に追及し得ないにしろ、現状程度の樹高のものに自然土および鉢植の花弁を混えた姿の方が30年前あるいはここ数十年前の文献の写真にみるようなサイプレスの高木が占有している形体よりはまさっているであろう。まして回教王の夏の離宮としてテンニンカ、ゲツケイジユ、オレンジ等の灌木類が当時植栽の基調となっていたことは十分推察しうるところであり、バラ、ゼラニウムなどの花が配されていたと想像することは決して不当ではあるまい。とすれば現況の方が数十年前のこのパティオよりも築造当初のものに近いことになる。

4. 第2露壇にあるツゲの刈込み。これだけを見ていると中世僧院の庭のようであるが、周辺には目もあやな配植が行なわれている。(1963年6月撮影)

このパティオとは主建築である宮殿を通じて連絡しているサイプレスのパティオも回教王時代のものである。ここは別名「水花壇」と呼ばれるように下段のパティオにもましてカナルと噴水をモチーフとしている。

中世といわず、スペインのパティオに用いられた水は目と肌に涼味を与えることを主な目的とした。カナルはもとより細い溝すら、できる限り明渠にしているのはそのためである。したがってカナル内に水生植物を育てることは考えられず、新庭園が純スペイン式でないことはこの一事によつても肯かれよう。

サイプレスのパティオにはその名のとおりに、サイプレスの巨木があり、そのなかの一本に「サルタン妃のサイプレス」があるわけである。このパティオは主庭園に劣

らず美しい。矩形の水面の中央に、これまた矩形の陸地を出島として残し、出島の中心に水盤をおいているが、噴水はここからだけでなく周辺からもまい上がるよう工夫されている。Bottomley とともに Nichols¹³⁾ はこ

5. 水階段。階段の両側に高く水が音をたてて流れおちるほか、水盤から出た水も巧みに下方の露壇に導かれている。(1963年6月撮影)

のパティオにおいて「ダイナミツク・シメトリー」の原理を明確に読みとりうると主張している。

このパティオから階段を南に登ると Gromort のいう第1花壇に出る。ここは東へ順次高くなっている。第2および第3の花壇と同様にツゲの刈込みを基調とし、そこに噴泉、水盤を配し、各種の花木、草花をあしらった区画で西方にアランプラを、そして南南東にシエラ・ネバダの連峰を遠望するのに格好の場所である。ただしこれらの露壇は近世になって付加されたものであり、イスラムの特色はうすくルネサンス調のものである。といってこれらの露壇がヘネラリーフェ全園にマイナスとならず、むしろプラスとなっていることも確かであろう。望楼もこれら露壇同様新しい作品であるが、第4露壇と望

6. 新庭園。イタリア・ルネサンス調の下部庭園は最近完成したばかりのもの。それ自体すぐれている上に旧宮園ともよく調和している。(1963年6月撮影)

楼のあいだの間道の北側から始まる水階段は古く、しかもすばらしい。水階段といつても階段全体に水が落ちているのではなくモザイクの美しい踊場にあたる3か所に水盤を設け、階段の両側に水が流れ落ちるよう工夫、意匠されたものである。本宮園にとつて最もユニークな局部といえよう。もちろん階段の両脇のうつそうたる樹林が水階段の効果をいつそう強めていることは疑いない。

グラナダといわずアンダルシア全州はもともと樹木の生育に適した地方とはいえない。そのことは宮殿、離宮の敷地以外の太陽の丘を初め、周辺の丘陵においてオリブの栽培がせい一杯である事実からも理解できよう。したがってヘネラリーフェ離宮にみるサイプレスを中心とする樹林の育成には並々ならぬ努力が払われたことを銘記すべきであろう。

ヘネラリーフェ宮園には上述した局部のほか、カナルのパティオの西部、モリングトウヒの巨木をもつ最下部の露壇がある。水盤から舞い上がる噴水はともあれ、小石をしきつめて美しい模様を描いた舗道にも、また配植にも捨てがたい趣がある。主建築の北に接したツゲの刈込みの、いわばセクレト園にあたる部分も一見の価値はあろう。

ただし本庭園の最もすぐれた、またユニークな局部はいずれも回教王時代に創造されたものである。Schneider⁸⁾ が言明しているとおりに体内に血の循環しているように、ここには水が全園を貫流しているが、上部の各露壇にもこの機能がフルに発揮されている点を多としたい。

またこの事実は近年新造された下部庭園についてもいえるところである。新庭園におけるサイプレスの刈込み方、カナルの水草を初め全般的な地割の仕方はアラブ風のパティオとは縁がとく、イタリア・ルネサンス調のものであるが、それでも決して旧宮園と不調和ではない。もし新庭園のターミナルである野外劇場の観客が不当に庭園をあらすことさえなければ、ヘネラリーフェ離宮にとつて新庭園の出現はあながち無意義とはいえないであろう。

4. むすび

回教文化を前イスラム式、アラボ・ビザンチン式、純正式および混合式の4つのカテゴリーに分けるとすればナスリーデン王朝によつて13世紀の後半に築かれ、のち間もなく改装、拡張されたヘネラリーフェの離宮は時代的には第3の純正式に属することになろう。しかしアラブラ宮殿の3つのパティオとは異なり、ヘネラリーフェには後年キリスト教徒によつて追加された局部がかなり多い。したがって回教文化とキリスト教文化との混合体であり、イスラム文化として最終のものである以上、形式的にはむしろ混合式のものと考えるべきかも知れない。ただしここではセビリアのアルカサル宮園のよう

に1局部に回教文化的なものとキリスト教文化的なものとは渾然と融合しているわけではない。すなわち2つの別の形体のものが相寄つて統一体をつくり上げているのであるから、いわゆるムデハール様式といい切れることは適切でないかも知れない。とくに本庭園の秀逸性はあくまでもナスリーデン王朝時代のものに帰せられる以上、回教文化が造園において生んだ最高の傑作であるとし、それに調和すべく近世および近年に露壇庭園と下部庭園が付加されたものとみなすのが妥当であらう。

「グラナダを見なかつたものはなにものをも見なかつた」とはスペイン人の間で知られている諺であるが、ヘネラリーフェを見なかつたものはグラナダを見ていないことは確かであり、それほどこの宮園の芸術的価値は高く魅力的である。

Summary

After explaining a brief history of the Generalife in Granada, the actual features of each patio and parterre, and also the relationship between them was discussed.

Although the two main patios, four parterres, the belvedere and lower small garden were constructed at different periods, they are well connected and make a splendid unity.

Considering the important role of the patio de la Acequia, we should say that the Generalife is one of the purest of present-day Moorish cultural inheritances.

引用文献

- 1) Fouquer, M. et A. Dûchene : Des divers styles de jardins. 1914
- 2) Ingalls, G. F. : The Generalife, Landscape Architecture vol. XIV, Oct. 1923
- 3) Coats, P. : Great Gardens 1963
- 4) Irving, W. : Tales of the Alhambra 1961
- 5) Navagero : Opera zit. aus Gotheins Geschichte der Gartenkunst I. 1925
- 6) Villiers-Stuart, C. M. : Spanish Gardens. 1929
- 7) Gromort, G. : Jardins d'Espagne. I. 1926
- 8) Schneider, C. : Spanische Gärten, Gartenschönheit V, 8 1924
- 9) Gothein, M. L. : Geschichte der Gartenkunst I. 2. Aufl. 1925
- 10) 岡崎文彬 : ヨーロッパの庭園 1956
- 11) Byne, M. and A. : Spanish Gardens and Patios. 1924
- 12) 岡崎文彬 : 近年におけるヨーロッパ名園の推移 (本誌投稿中)
- 13) Nichols, R. S. : Spanish and Portuguese Gardens. 1924